

る。また、夏の第2主成分も夏のAOと呼ばれるパターンであると考えられ、1980年以降では上昇トレンドが見られる。

長期間の観測データの蓄積が進み、数十年規模の変動や長期トレンドが解析できるようになってきている。最近数十年の変動としては、長期トレンドが顕著に見られる要素も多い。ただし、言うまでもないが、長期間のデータを解析する際には、観測データの品質の変化にも十分注意を払わなければならない。空間的・時間的に均質なデータとして、使用されている客観解析データ（再解析データ）も、この観測データの品質変化が少なからず反映されている。これらに十分に気を付けながら、引き続き気候の変動を監視していきたい。

お詫びおよび謝辞

編集作業が遅れ、一年遅れの研究会報告になってしまったことを、ここに心からお詫びいたします。また、講演を快く引き受けてくださった諸氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 松原廣司, 2003: 南極昭和基地における定常気象観測の歩みと現状, 天気, 50, 599-604.
 牛尾収輝, 2003: 頻発する南極リュツォ・ホルム湾の海水流出—1980年~2003年の海水状況から—, 南極資料, 47, 338-348.



平成17年度気象研究所研究活動報告会開催のお知らせ

気象研究所では、下記の要領で「平成17年度気象研究所研究活動報告会」を開催いたします。どなたでもご参加いただけますので、皆様のご来場をお待ちいたしております。

なお、詳細につきましては「気象研究所ホームページ」をご覧ください。

記

日時：平成17年7月21日（木）13時10分～16時40分

場所：気象庁講堂

プログラム

司会 石原 正仁（気象研究所 企画室長）

13：10～

報告1：新たな中期研究計画と研究推進体制について

報告者：藤谷徳之助（気象研究所長）

13：40～

報告2：日本における猛暑と大雨の実態に関する研究

—「異常気象」の解明を目指して—

報告者：藤部 文昭

（予報研究部 第三研究室長）

栗原 和夫

（環境・応用気象研究部 第三研究室長）

—休憩（14：35～14：50）

14：50～

報告3：平成16年の上陸台風の総合研究

報告者：中澤 哲夫

（台風研究部 第二研究室長）

15：45～

報告4：山岳性降雪雲の人工調節に関する研究

—水資源確保を目指して—

報告者：村上 正隆

（物理気象研究部 第一研究室長）

16：40 閉会

問い合わせ先：気象研究所企画室

電話：029-853-8546

e-mail：houkoku2005@mri-jma.go.jp

Homepage：http://www.mri-jma.go.jp/